

# 平成26年第410回信濃町議会定例会9月会議 会議録(4日目)

(平成26年9月9日 午後2時15分 再開)

●議長(小林幸雄) 休憩前に続き会議を開きます。

通告の9 青柳秀吉議員。

1. 医師招へい対策について
2. 人口増の職員意識について

議席番号10番、青柳秀吉議員。

◆10番(青柳秀吉) 議席番号10番。先に通告してあります二点について質問いたします。一つは医師の招へい対策。それから人口増の町職員の意識の二点です。以前行いました特殊勤務手当に端を発しての、公務員の職務専念義務違反に抵触するような追及をするつもりはありません。

最初の質問について、ちょっと通告はしていないのですが、おそらく分かっていると思いますが、教えてもらいたいことがあります。信越病院の外来月間患者構成比率はおおむねどうなっているか、分かりましたら教えてください。例えば、内科が何パーセント、整形が何パーセント、外科がどのくらいだと。月の患者数ですけれども。もし、分からなければ、後でまた教えてもらいたいと思います。どうしますか。

●議長(小林幸雄) 松木町長。

■町長(松木重博) すみません。最初は私が登壇することになっていますので、申し訳ございません。専門的な病院のことでございますので、事務長のほうからお答えさせていただきます。

●議長(小林幸雄) 北村病院事務長。

■病院事務長(北村 勇) 各科の比率でございますけれども、正しい資料がございませんので、至急調べて後程ご報告いたします。

●議長(小林幸雄) 青柳議員。

◆10番(青柳秀吉) 別にそんなに正しくなくても良いんです。ただドクターの数を招へいする時に、じゃあ整形なら2人ぐらい必要なんだ、外科は1人で良いんだ、そういう大まかなことなんです、それによってやっぱり招へい対策というのは変わってきますから、その点をちょっと知りたかっただけですね。

それでは、議員は住民の代表として選挙で選出されるわけなんですけれども、住民の利益を逸脱する活動は厳に慎まなければならない。これは町の条例の改正すべき条例があれば、改正しなければならないというふうに思っております。私が議会に出た

大きな理由の基盤は、一つは、町唯一の信越病院を、健全経営で、住民の命と健康を守るという病院に改善することです。二番目の理由は、高齢化社会に対して、おらが庵の増床ということで、腹に決めて出たわけです。これについて、一般質問と活動については、この5年間80パーセントぐらいの労力を費やしてきております。また、当時の支援者からは、絶対にぶれるなというふうに、くぎを刺されてきましたが、その反面、青柳は病院のことしか質問しないというようなことを言われたことは残念だなというふうに思っております。特に、信越病院につきましては、赤字体質からの脱却を目指して、経常収支比率、それから医業収支比率、それから職員の給与比率、病床利用率などを焦点に当て、質問をして改善を図ってきました。

病院はここ3・4年、黒字が続き、本議会冒頭でも、純利益が467万、それから当年度末未処理欠損金は4億8000万強に減ったと、町長が述べております。これは病院職員皆さんの努力の結果というふうに評価しております。町長は町立病院あり方検討委員会を立ち上げて、住民の皆様から一層信頼される病院になるように取り組みをしていることは、ここは非常に大切なことであるというふうに思っております。

全国的に医師不足は深刻で、地域医療の再生は困難を極めているというふうに言われておりますけれども、最も大きな原因は多々ありますけれども、私は、2004年に制定された新臨床医研修制度、この制定。それから従来からの、医局制度の崩壊。医局制度の崩壊というのは、皆さん、「白い巨塔」を見たことがあるかと思っておりますけれども、あの通りなんです、中味は。教授が人事権、その他もろもろのものを一切持っております。そういう体制の中では、医師不足というのは、あまり起こってなかったんですね。この臨床医師制度が制定されてから、急激に医師不足が表面化してきます。これは、いろいろ原因はあるんですけれども、さっき言った制度の制定ですね。それから医療の高度化、専門化、それから女性の医師の増加等が、私は考えられるのですが、平成元年、今から25年ぐらい前では、医学部の定員数が7500人程度です。で、平成23年は8993人と増えているわけですね。それで昭和30年ぐらいの時と比べますと、昭和30年の医学部の定員は3000人を割っております。それから比べますと、現在の定員は約9000人と、ものすごい数で増えているんですけれども、皆医師不足だというふうに言っているわけですね。この辺が非常にやっかいなところで、ここも質問しようと思ったんですけどやめました。

ドクターがいなければ医療行為はできないんですよ。医療行為ができないという事は、収益が上がらない。収益が上がらなければ、病院の収支は大赤字になると。その結果、病院財政は破たんし、病院を閉鎖しなければならないようになったと、これは夕張市の例が良く上げられます。

そこからですけれども、医師招へいの病院の活動というものは、過去はどういうものであったのか、それと現在ですね。どういう形で医師招へいをやっているのか、お伺いします。よろしいですか。

●議長（小林幸雄） 北村病院事務長。

■病院事務長(北村 勇) それではお答えいたします。その前に先ほどの外来比率でございますが、一番多いのが、整形で34.2パーセント、内科が27.4パーセント、その次、脳外科の9.4パーセントの順でございます。

現在までの医師の招へいの状況でございます。当院におきましては、ご存じのとおり、平成17年に常勤医が3名という事態がございました。それ以降、町を上げて、医師の招へい活動に取り組んできたわけでございますけれども、同年度にコンサルタント会社の助言、あるいは地域住民の皆さんの協力を得ながら翌18年度には7名の方が、病院のほうに見学に訪れていただきました。その内、内科医が3名、整形外科医1名を、その年採用することができました。以降の採用といたしましては、19年度に内科医1名、それから20年度に内科医2名及び外科医2名を採用してございます。ただし、若干入れ替わりがあるということでありまして、大体常勤医が7名から8名ということで、現在まで推移してきたところでございます。

●議長(小林幸雄) 青柳議員。

◆10番(青柳秀吉) 現在も医師招へいに関しては、だいたいコンサルタントをお使いだというふうに解釈してよろしいのでしょうか。

●議長(小林幸雄) 北村病院事務長。

■病院事務長(北村 勇) はい。それではお答えいたします。現在の状況でございますけれども、まず本年度8月1日付で、内科医1名採用となっております。ですから現在常勤医は9名となっております。

それから招へいにかかる対策でございますけれども、現在医師確保対策としましては、病院のホームページでの募集はもちろんでございますけれども、インターネット上でコンサルタント業者等が開設している医師の募集サイトへの掲載、あるいはその業者への訪問、それからあと全国病院協議会あるいは県の医師対策室等への医師の紹介あっせんをお願いをしているのが、主な活動でございます。

●議長(小林幸雄) 青柳議員。

◆10番(青柳秀吉) コンサルタントさんは、このお金の支払いというのは、定額で出しているのでしょうか、それか出来高で出していくのか、最近また変わったのかどうか、その辺を含めて、募集の概略を教えてください。

●議長(小林幸雄) 北村病院事務長。

■病院事務長（北村 勇） コンサルタントへお願いした場合の費用の関係でございますが、医師それから看護師として正規職員としてなった場合でございますが、その場合には、それぞれの年間給与費の20パーセント相当額を報酬としてお支払してございます。それから臨時の職員として紹介いただいた場合には、額がもともと低いということで、25パーセント相当の支払いをしてございます。

●議長（小林幸雄） 青柳議員。

◆10番（青柳秀吉） この新臨床医師制度が制定される前は、医師は全部教授の命令で動いたんですね。ですからその当時は、医師不足というのは、全く私は感じていなかったんですけども、まあ、教授というのは絶大な権限を持ってまして、「この紋所が目に入らぬか」という感じ、医学部の教授というのはそういう人でした。

今言ったのは、その経費のことなんですけれども、採用されたら年収の20パーセント、臨時の場合は年収の25パーセントということで払っているわけですね。定額というか、常に払っているわけではないんですね。

●議長（小林幸雄） 北村病院事務長。

■病院事務長（北村 勇） 先ほど申しました、ウェブサイトのほうに、特に募集をお願いをした場合には、その分を払いますけれども、招へいに関しては、常に払うというものはございません。

●議長（小林幸雄） 青柳議員。

◆10番（青柳秀吉） 医師派遣の対策として、現在は昭和大学それから長野市市民病院、それから長野中央病院などの支援を受けて、その面での病病連携は、やっているということですね。で、将来、共に安定した医師の招へいができるように、自治医大とか、信州大学医学部を訪問したことはあるでしょうか。

●議長（小林幸雄） 北村病院事務長。

■病院事務長（北村 勇） ただ今お話のあったような大学、特に行った経過はございません。ただ、今後も考えているのは、昭和大等につきましても、だんだんとそれぞれの派遣を絞って来ているという状況が聞こえてございますので、長と相談する中で、できれば10月には、訪問してまいりたいというふうに考えてございます。

●議長（小林幸雄） 青柳議員。

## 平成26年第410回信濃町議会定例会9月会議 会議録(4日目)

◆10番(青柳秀吉) 現在のドクターは9名ということなんですけれども、院内の先生との、先生の出身大学から派遣してもらおうような、医局内での話し合いというのは、やったことがあるのでしょうか。

●議長(小林幸雄) 北村病院事務長。

■病院事務長(北村 勇) 従来から信越病院については、ちょっと特別だと思うのですけれども、大学の医局との絡みの中で、その派遣、あるいはそういう形の中で、先生が来てくれるという形を取ってございませんでした。ですからそれぞればらばらの学校から皆さん来ているという状況でございますので、特に現在も、その先生方の出身大学のほうへお願いしてということはやってございません。

●議長(小林幸雄) 青柳議員。

◆10番(青柳秀吉) 過去においては、昭和大学はあったんですね。過去にはあったんだというふうに思っています。で、病院はできたが、ドクターがいない、となれば地域医療が破たんするのは、もう目に見えております。こういう事態になれば、厚生連とか、徳洲会とか聖隷福祉事業団とか中央医科グループの傘下に入るしか道はなくなってくるというふうにお考えですか。どうでしょうか。

●議長(小林幸雄) 北村病院事務長。

■病院事務長(北村 勇) 先ほども申しましたとおり、現況、信越病院の場合、その必要な医師数、大体9名から10名の範囲になります。外来それから入院の数から算定いたしますと。その内、現在9名の常勤医がいるという状況でございますので、こういった形の中で、また更に、患者さんが必要とする科の先生方を、できるだけ確保して、町立病院として、ぜひとも残していきたいというふうに考えております。ですから先ほどのようなことは考えてございません。

●議長(小林幸雄) 青柳議員。

◆10番(青柳秀吉) そういう大きな、いわゆる民間の病院ですよ。徳洲会みたいな。そういう病院の傘下に入ることは、私は好ましくないというふうに考えていますね。ただ病院経営の問題に関しては、経営というのは、財政と、もう一つ経営だと言われております。この間、仙台まで、城西大学の伊関友伸先生の講演を聞きに、セミナーを受けに行ったんですが、その中で、やっぱり一番、病院の経営とか赤字になるとか、医師の獲得、獲得という表現はないですから、招へいに関する問題は、役場の職員とか、市の職員が経営にタッチする、これが一番の弱点だそうです。ですからそうい

う病院の経営に精通した専門家を病院に置くことが、一番良いというふうに言ってますね。この間の平成25年の第22回の経済財形諮問会議、この議事録の中には、これは議長が、安倍総理大臣なんですが、あとお歴々の方が並んでおりますけれども、この中で総理がこういうことを言っていますね。「自治体病院の事務長が、医療経営の専門家でないことが多いが、医療経営の専門家をあてた自治体病院は、画期的に経営が改善しているところもあると聞く。自治体病院の経営は、経営の仕方でもかなり変わるのではないかと思う」と、そういうふうに言われております。現在の体制が悪いとか言うのではなくて、外部の方も、そういう認識を非常に持っている。したがって、私は前から思うんですけども、やっぱり専門の経営の人を連れてくる、しかも民間の病院をやった人、そういう人であれば、かなり変わるというふうに、私も思っています。この諮問会議かな、伊関先生も言ったように、その一番の弱点がそこにある。専門家以外の方が口を出すということは、ちょっとまずいのではないかなというふうに、はっきり申し上げてありますね。そういうことで、病院ではなくて、町の職員の方だって、病院の経営したことがないのを、しなくてはならないと、これまたつらいことだと思う。私はそう思っていますね。私らも経営のこと、病院経営に関しては、まったく素人ですから、やっぱり民間病院の事務長なんかは、かなりシビアに計算高くやってきますのでね、まあ加算の問題なんかも、かなり改善していくと、ああ違う、診療の内容を替えていくと、加算の問題が加算されて、かなり経営状態が良くなっていくというようなことも考えています。

このドクター招へいの問題に関しまして、私は自治医大とか、この近くだったら厚生連ですね。厚生連とか、中央医科は遠いですが、中央病院なんかも良いんじゃないか、もしドクターが本当にいなくなったら困りますから、そういう対策もぜひ取っておいてもらいたいなというふうに考えています。特に自治医科大学はそういう観点から設立された医科大学ですのでね。

それから確かに整形外科は今、34パーセント、かなりの患者数で先生の苦労も大変だろうと思います。この整形外科に関しては、ぜひ2・3名いても良いのかなと思っていますので、この整形外科のドクターの招へいには、かなり神経を使って、それ一本に絞って、おそらくやっても良いんじゃないかなというぐらいに思っております。

そういうことで、引き続き今現在、あり方検討委員会が出来上がっていますので、将来の病院の病院像というものは、そこである程度決められて回答してくるのではないかと思いますので、いろいろは申しませんが、ぜひドクターの招へいに関しては、病院当局として、しっかりした対策を持って取り組んでもらいたいというふうに、私は考えておりますので、よろしくお願ひします。これで前段の質問を終わります。

次に、町内在住職員の職員数の現状についてお伺ひしますが、先ほど出ましたけれども、病院を除いた庁舎の、信濃町役場の庁舎の中の、中では町外の人達は何人いらっしゃるのでしょうか。

●議長（小林幸雄） 北村総務課長。

■総務課長（北村政光） はい。病院を除きまして、職員数は78名でございます。町外から通っている職員につきましては49名でございます。以上です。

●議長（小林幸雄） 青柳議員。

◆10番（青柳秀吉） 73名のうち43名。102名じゃないかな。今現在。

●議長（小林幸雄） もう一度お願いします。

■総務課長（北村政光） 病院を除く職員でございますが、町内に居住している職員が78名。町外から通っている職員は49名でございます。でトータルでは127名でございます。以上です。

●議長（小林幸雄） 青柳議員。

◆10番（青柳秀吉） ありがとうございます。できましたら、採用段階で町内の方を重点的に採用してもらおうと人口増にも繋がるし、私はそう思っています。これは職業選択の自由とか居住権の自由とか、憲法で定められていますから、強くは言うつもりはありませんけれども、採用段階の点数によって、面接になるならないも、その辺を考慮してやっていただけたらなというふうに思っております。かなり時間を残しておりますけれども、これで終わります。

●議長（小林幸雄） 関連質問のある方。

なしと認め、青柳秀吉議員の一般質問を終わります。この際、3時まで休憩いたします。

(午後2時42分)